藝藩通志

尾道一二

三十三　三十四

和書門 類
二二六〇五 號
二〇二 函
一一 架
九二 冊

内閣文庫
和書 類
二二六〇五 號
一七五 函
一一 架
九二 冊

内閣文庫
番號 和 22605
冊數 92（18）
函號 175 171

国立公文書館
National Archives of Japan

藝藩通志巻三十三

備後國尾道

第一

圖
疆域形勢
公署
市街
官道駅站
戸口

日本政府圖書
圖書局文庫
內 一一〇一六號

牛馬舟船
祠廟
寺院
第二
古蹟名勝
物産
人物
孝義

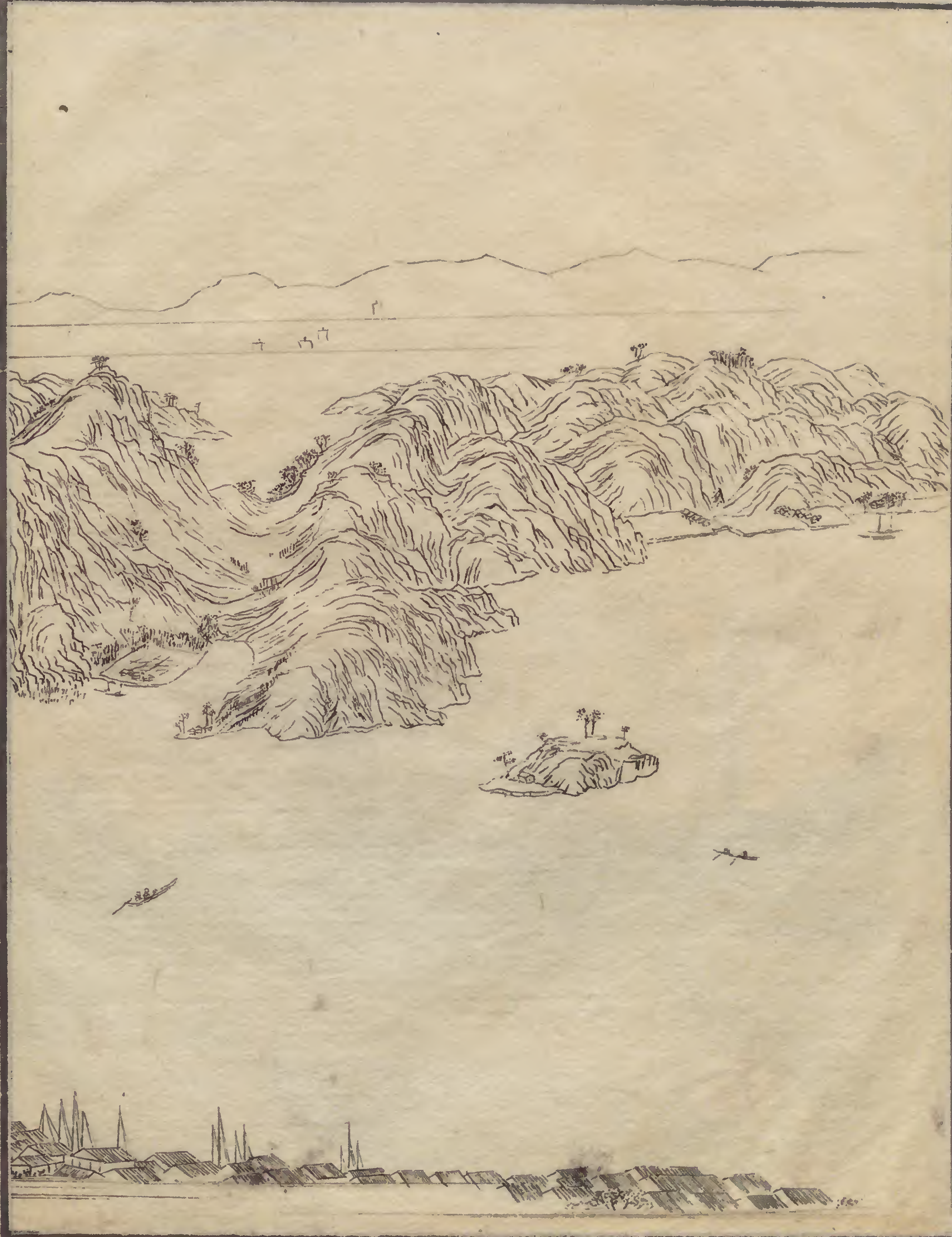
藝藩通志 巻

故家
土官流寓
墳墓

西
向島東村
向島西村分留島
南

尾道町
市街之外皆後地村地
北
東

向島
千光寺



藝藩通志巻三十三

備後國尾道一

疆域形勢

尾道町ハ、御調郡の東南にありて、一大市聚なり、藩府廣島を去る、十九里半、廣十町餘、袤五町餘、尾道の名義詳ならず、たゞちに、此地ことは、海涯の地甚狭く、山足にそふて、往来すれば、山の尾の道といふを以名づけしにや、土人おほくらく、地ことを玉

を出て古歌に詠、玉浦なとありと、海東諸國記に尾路関とあり、圖書編、三才圖会、登壇必究、並に、和奴密智と書て、皆此地を云なり、別に市令を立て是を治む、市後及び左右は皆郡村の所管なり、東西北は皆後地村の地続りて、村の諸山列り、南は海にて、向島と對ひ、その間纔に六町を隔つ、この地山を負ひ海に臨みて、人家櫛のごとく、立ちならべり、中に官道あり、縦横に街巷を分つ、源貞世道ゆき

藝藩通志　巻

ぶりに、北にならびて、向ひは深き岩屋なりし所山あり、ふもとまでそひて、家ども所せく、ならびて網などほすほどの庭ぞなく、となんいへり、貞世の時既にかくのごとし、今は實に尺寸の地をあまさず諸國往来の舟船、ここに輻湊し、百貨交易便を得て、富商多く、西國の一都會なり、

公署

奉行屋敷　大手町の西にあり、元ハ中屋敷久保屋敷と称する所にあり、代官吏番に陪て志せに居る、正徳五年、町奉行一員を立て、市中の事を掌らしめ、郡官ハ豊らで、中屋敷ハ、里人に賜ひ、久保屋敷ハ、後地村に移さる、

新蔵所　大手町西にあり

運上所　久保町、宮崎にあり

銀札場　久保町、東町にあり

長江屋敷　十四日町、新町にあり

町役所　大手町にあり

本陣　十四日町にあり

用屋敷　久保町にあり、もと中屋敷と称せし

表家屋　久保町にあり

社倉　久保町にあり、寛政丁巳創建

綿座　大手町西にあり、寶暦辛巳、はじめて立く、

問屋座 土堂町濱にあり、安永庚子、始て立く

市街

久保町 或ハ窪町と書す、長三町四十八間餘、此町、尾道の町三ケ名の内なり、此町内、七巷を通す、

宮崎町 八幡宮あるを以かく称す

石屋町 石工多く住す

長江町 もと長き入江なりしといへ、西側ハ十四日町に属す、

長江新町 長江町に續きて、新に開く所なり、西側も右に同し

新開 久保町南裏、宮崎裏、などを云、元祿年中、新に開く、もと田畠の為に築しなれど今ハ、もはら宅地となりぬ、

米場新地 薬師堂濱東の方をいへ、寶暦年間に、此地を開き、米穀の市をたてし

沙寄新地 寶暦年間ひらく、此地に娼家あり、舊ハ幸前にあり、後に板小路渡場なりしも移し、今ハ此地にあり、太平記に、将軍筑紫より御上洛ハ、必定て鞆尾道の傾城ども多く、召具せられしならんとあり、

十四日町 昔ハ毎月十四日、市貨交易をなし、因て此名を遺せる、長一町廿間、この町、まさしく尾道の町三名の一なり、五巷あり、

藥師堂濱 成福寺薬師堂の前に在るを以かく称す

山木戸 長江新町裏をいふ

いふ、天正年間、大寶山、故城に杉原氏ありし圓閣を置く、故に此名遺れり、　念佛堂前 正授院念佛堂の前なり　鍛冶町 鍛冶の住ける處　古魚店 明暦年間まで魚棚ありしといふ、西側ハ土堂町に属す、

土堂町 ことし、此地に辻堂あり、辻土、土音近きハ、誤称せしといふ、町を中分して、東土堂町、西土堂町と称をすへて、此あるを、御所といふ説ハ祠廟説に見ゆ、此町、また尾道の町、三名の一なり、長五町六間半、七巷あり、

荒神堂濱 荒神社の後なり　幸前 幸神社の前　寺小路 西土堂町、小の小路を云、福善寺の旧地　渡場町 向島へ行、渡口なり　漁師町 漁者多く住居す　今町 正徳初年、久度の地を起して再ひ市鄽を開く、故に名とす

住吉新地 元文年間、新に開き、住吉神社を建り、

・官道驛站

西國路　市中凡十町餘、

驛所　市中にあり、驛庭を立て、傳馬を設く、逓送東ハ今津驛に至る、一里廿七町、西ハ三原驛に至る、三里、

一戸口

家二千九百二十六戸

人九千四百八十八口

女四千六百七十四人　社人八人　僧六十七人　醫者十一人　瞽者二十二人

一牛馬舟船

牛二隻　馬十匹

藝藩通志 卷

舟船、二百三十五艘、百七十石以下

祠廟

八幡宮　亀山にあり、貞観年中、勧進といふ、仁治應永、永正重脩し、後毛利氏よりも、修営ありて、太馬など寄納あり、その後、又回禄に罹りて、元禄壬申改造る、今の社是なり、拝殿、神楽殿、神供舎、随身門、神輿舎などあり、末社七宇あり、石鳥居は萬治二年に建り、山下に、もと御井神池あり、水皆浄泉あるの地に入る、

嚴島神社 宮崎一ニ栗島ニあり、此地元ト海中の小島なりしと云、末社二宇あり。

山王社 西江寺の北山の後ニあり、一ニ楼本社ト称す。

幸神社 幸前(さいのまへ)といふ地ニあり、古伝ふ此地、元ト海辺の通路なりし、故ニ、古の道祖神を祭る、社記ニ云、天正の比、里民某、夢中ニ感する所あり、地を求めて、一璞を得、因て社を建て、是を祭る、或ハ天正より前、既ニ此社あり、天正ニ、再造して得る所の璞を納むといへり。

艮宮 大宝山南ニあり、伊奘諾尊を祭る、大同丙戌歳建すと云伝ふ、後火災ニ罹り、文明乙未再造棟札ニ平堅祐とあり 後しばしば重修あり、今の社ハ、宝永年間ニ造る所、祝殿、拝殿、廻廊、供所、神楽殿、舞台、神輿舎、随身門等までも備り、末社五宇あり、苦神田あり、今その寄附状を蔵む、

住吉神社　新地にあり、もと浄土寺の内にありしが、元文年間、此地をひらき、寛保辛酉、社をたつるに後なり、

荒神社　土堂町にあり、里人相伝ふ、此社、舎人親王をまつる、故に此地を御所と呼ぶ、荒神ハ、皇神の訛ならんと、按るに、親王ハ、尽敬崇道皇帝と追号ましハ、御所と称せし、謂なきにあらずぞ、荒神ハ、他にも多くあれば、必しも皇神の訛にもあるべし、二神同殿に祭るも知べからず、

幸神社　久保町にあり、延宝戊午再造、末社一宇あり、

天満宮　大山寺の内にあり、菅公の画像を祭る、これ、公の自ら画ける所といひ、伝へきを、御袖の御影といふ、里人、金屋某が記に曰、菅公謫紫遷謫の時、船を此地にいこめ（今の長江町の地なりしといふ）海辺に徜徉し給ふ、金屋氏の祖某、公を己が家に迎

一て、麦飯醴酒を供え、公志を悦ひ、去るに臨て、自ら衣袖を截て、像を画き、志を賜ふ、後に祠を建て祭り、別當僧寺を立く、大山寺是なり、こ、今も祭日には、金蔵氏より、麦飯、醴酒を、社に供え、倶に白大夫を祭る、小祠あり、享保丙申、随身門を建つ、

祇園社　常称寺の内にあり、もとは、市中にあり、或ハ云、明暦四年、今の地に移し、石鳥居ハ、正徳年間に建る所なり、末社四宇あり、

寺院

千光寺 下同 真言宗 市後の山上にあり、大寶山權現院と号す、寺に巨巖あり、むかし、寶玉を出す、因て山号とし、また熊野權現あるを以、院号となこふ、開基詳ならず、或ハ云伝ふ、大同丙戌歳建多田満仲、おもて重修せりと、今の堂ハ、貞享三年に造る、昔ハ三重塔ありて、故城主杉原氏の護身佛毘沙門を、安置せしか、二百年前、破壊を

因て、別に堂を建て、本尊を安せ、其旧地に今
護摩堂を置く、其他、宮殿及ひ小祠小堂等あり、
當ハ、権現領にて神田あり杉原氏寄附の經刀
現存せ、其の寺、南海に向ひ、覧眺の勝、山の地乃
第一なり、諸家の題詠、藝文に載せ、

大山寺　米瑠山と号に、菅神社乃別當なり、故に
天神坊とも称せ、開基詳ならさて、或いハ云、延久永
間、僧慶鐙開基。

善勝寺　潮音山と號す、もと禅宗にて、補陀落山
善性寺と称し、故城主、杉原氏の菩提所なり、後
久しく住持なく、慶長年間、僧性意、来住し、改宗
して、寺号山号共に改む、宮殿、護摩堂あり、寺
後の山上、巌窟の中に、太神宮を祭る、

西國寺　摩尼山、摠持院と号に、京都仁和寺に属
せ、寺記に曰、天平年間、行基此の地に寓居し、一
乃秀木を得て、自ら仏像を刻み、寺を建て安置

を治暦丙午、災に罹り、延久年間、僧慶鑁来住を
なの僧、仁和寺性信法親王の弟子なり、故を以
永保辛酉、朝廷綸旨をくだされ、寺を再造して、命
して勅額許されたまふ、天仁元年には、勅して不断
経乃法を修しむといふ、正和年間、寺領を賜ふ、尤
大辨執達の文書、現存す、後まゝ回禄に罹り、僧
宥尊、足利義教に請て、重脩を、義教、財を施し、三
重塔を造る、其他、堂宇ことごとく當時大族の營む所

藝藩通志 巻

なり、永享壬子、落成し、門堂樓塔、大に備る、福島
氏の時、寺領を失ひ、後まゝ南大門、總門、二王門
なども、焼失せしが、今尚一巨刹たり、古経、佛典、
數十種を蔵せり、寺ハ境内に、般若院、持善院、金剛
院、東坊、常福院とて、子院あり、皆慶鑁が創る所
なり、今ハ金剛常福、二院のみありて、餘ハことごとく
廢せ、門墻など後に造るもあり、今の唐門ハ、杉
原氏の古城門を用ひしなりといふ、額ハ、覺深法

親王の書なり。

浄土寺 律宗 小月 市東の山麓にあり。轉法輪山、大乗院と号す。初め、高野山金剛寺に属し、今京都泉涌寺に属す。當寺多宝塔に蔵する法華経の巻尾に、推古天皇廿四年丙子、聖徳太子、始建浄土寺とあり。いまだ真否を詳にせず。弘安正應に至寺漸く頽破す。嘉元年間、僧定證修営す。金堂、講堂、五重塔、鐘樓、食堂、厨舎までも備りしが、正中

二年、災に罹る。嘉暦貞和乃際、重造して、舊に復しぬ。元弘年間、綸旨を下されて、祈禱を命せらる。因て、因島の地を賜ふ。建武三年、足利尊氏筑紫に走る。時此寺にやどり、近國の兵を招く。後大軍を帥ひ、北上し、又此寺を訪ひ、僧道通及び士卒と共に、普門品念彼偈を分ちて、題とし、歌三十三首を作り、尊氏手書して、佛前に供ふ。其詠現存せり。今矢籠の間と称するは、尊氏止宿の處

なりしハ、應安七年義満が、此寺に至れること後太平記に見えたり、尊氏直義、寺田を施入し堂塔を修營せり、元弘の綸旨以下、古文書、凡七十餘通、其他、古経書画の類、珍蔵するもの多し、開山堂に、聖德太子の木像を安置し、方丈に尊氏の位牌を置く、又後白河帝の納経塔と稱する塚あり、僧定證、嘉元四年、起請文に、南浦者高野山根本大塔頭後白河法皇勅願云々とあり、寺

内に小祠数宇ありて、丹生明神社ハ、昔は祭儀隆盛なりし、其記今存れ、又昔ハ、光明會、観音会などごときこともありしといへり。

萬福寺 浄土寺山にあり、浄土寺奥院と称し、享保元年重修せり、

海龍王寺 浄土寺境内にあり、一に曼荼羅堂と称せり、開基詳ならず、按ずるに、浄土寺の書記に、永仁六年僧定證、紀伊より来り、曼荼羅堂に寓

居し後ハ浄土寺ニ移るとあり、然れハ此寺永
仁より前ニ開基ありし、寺内嶮岸数十丈の
上ニ小神祠あり。

吉祥坊 十四日町ニあり、恵日山と号す、正和年
中、浄土寺の僧空教開基。

天寧寺 禅宗 海雲山と号し、普明国師開基と云。
貞和年間足利尊氏営造して、七堂伽藍あり、境
内凡三町許の地を占むといふ、後田禄ニして、門堂

多く廃し、只五層塔を遺せり、元禄年中、重修し、改て三層として、文
禄年間、僧一雲中興す、今禅堂位牌堂経蔵あり。
寺の門並、廃址礎石の存するもあり、今信行庵
の西ニ石あり、天聖の二字を彫る、是此寺乃
聖なりしといふ、又十四日町の内、古魚店とよぶ地
を一ニ天寧寺大門と称す、当此寺
の大門なりしあるしなるへし。永禄年間足
利義昭、歳米百二十石を施入し、禁榜かゝけ下
馬牌を建けれとも、其の文書数通を蔵す。

須弥壇 天寧寺の傍にあり、天寧寺の末寺にて

ハ、鎌倉西明寺ニ居せしと云、享保の比ハ、其乃
傍ニ尼寺三宇ありしが、今ハたゞ一宇を存す、
堂ニ古額あり、西明菴と書す、背ニ記あり、永和
第二秊則晦日、釋景瑛書之、

光明寺 浄土宗 下同 清浄山、寂幢院と号す、開基知れず、
相伝ふ、建武三年、僧道宗、足利尊氏ニ従ふて、此
寺ニ来り、後再ひ来り、名を聖海と改め、遂に
住を後住發願と云あり、毛利氏の恩遇を得て

寺頗る盛なり、享保年間、宝鏡寺親王より、帷幕
釣燈及ひ扁額を賜ひ、祈祷所とせられ、境内ニ
松源院南坊と云あり、並ニ大永年名寂述、

寶土寺 如意山光明院と称す、貞和年中、僧融海
中興す、境内ニ西坊と云あり、融海か開建なり、

持光寺 日輪山、金剛壺院と号す、永徳二年、僧頓
了再造、

正授院 伝法山、善光寺と称す、応永元年開基、旧

ハ禅宗なりしか、僧信誉改宗し、慶長年間僧純誉中興せり、元禄年中より、常念仏の業を行ふ、江都増上寺、僧祐天これを感嘆し、幕府歴代の霊牌を、此寺に納む、その他、寄附の物あり、

信行庵　浄生山、安楽院と号し、もと向島にあり慶長年間、僧行欣、その地に移せり、

念仏院　花林山、実心寺と号す、相伝ふ、元和の初加藤靭負と云ふもの、大坂の軍に出て後、橋本と云地に隠遁し、姓名を改めて、橋本次郎右衛門と称し後ち茲に来り、此寺を創む、次郎右衛門法諡を花林浄雲禅定と云ふ、寺に橋本氏、歴代の位牌あり、

海徳寺　時宗　小同　龍燈山と号す、建治二年、遊行初代一遍開基す、俗この寺を、沖道場とよぶ、昔ハ寺地、海中にはし出たりといふ、其の傍に、龍燈松といふあり、寺に、古鉦銘を蔵す、一遍用ゐる所といふ

境内三小祠あり

常念寺　尾陽山願王院と号し、正應年中、遊行二代、他阿開基、文和年中、災に罹り、足利尊氏再造せし堂の天井、柏木など用ゆ、故に里人一に柏堂と呼ぶ、延寳年間まて回禄に遭ふ、此堂及ひ大門ハ災を免る、境内に、玉蔵院、蓮池庵、被泉庵、二寮南寮、布施屋、珠数屋、台所なども有り、ことに尚時他阿に従来りし女僧ども居し處あり、今その旧に依る、又むかしハ一寮、三寮、卜隠屋敷といふもありしか、皆廃す、卜隠屋敷は、上野屋、松田正房入道、他阿に従来り卜隠と号し、ここに住す、子孫商市中に徙る、因て廃す、祇園社及ひ小祠小堂有

以下同宗の寺、多く鎮守神祠あり、今悉略せり、

海福寺　無量山、浄光院と号し、元應年間、傳但阿弥開基

西江寺　智月山、等持院と号す、もとは、獅子山と

藝藩通志　巻

号せしにて、正慶年間、遊行六代僧一鎮開基、足利尊氏、二萬貫を施入して、文和二年南出、沼隈郡池田莊、寺地を寄附す、貞治年間、女僧大一房、大門を造ると傳ふ、大一房ハ、南出、相方城主の室人なりしが、尼となり、此地に住し、延文貞治の際、此寺の傍に尼寺十二宇を建つ、正保年間までは、菱徳庵、珠松菴、松寮、東寮、西寮と名を存せしが、後悉く廢して、今竹林の中に、古井あり、俗に

曝布井と呼ぶ、昔女僧、布を濯く處なり、

慈観寺　欣求山、安養院と号す、貞治年間僧慈観開基

正念寺　来迎山と号す、天正二年、僧覚阿弥開基、

十王堂　延亀山、地蔵院と号す、元和年間、僧相阿弥中興、鎮守の外、人丸祠あり、

毘沙門堂　獅子山と号す、寛永年間、僧浄阿弥中興、

永福寺 生田山と号す、正保年間、僧桐阿弥中興

水之庵 詞湯山薬師院と号せしを、禅宗にして、猶瑞光院、竹林寺と称せしを、後宗名寺号共に改む、相伝ふ、此寺に昔温泉ありと、今寺庭に古井あり、その水能く病を療すと云ふ、

成福寺 禮拝山と号す、僧覚応中興すといふ、云伝ふ、開基及び中興の年月伝らず、

極楽寺 開基知れず、今零落せり、

妙宣寺 法華宗 本覚山と号す、寺記に曰、文和三年京都妙顕寺僧大覚開基、大覚は近衛経忠公の男なりと云、彼家より寄附の物多し、今僅に古器及び紫幕を存せり、山号もと長恩山といひしが元禄六年再造して、今の号に改む、

浄泉寺 真宗 小川 遊亀山と号す、もと観音院の廃地に、天文十二年、僧宗円、此の寺を建つ、もと高砂、市原村に在しを移せし、今市原村に浄泉廃地あり、境内に、南察小察と云ふあり、並

は、慶長年間に建、

福善寺　光明山と号す。古伝ふ、天正年間、僧川崇播磨より来り、宮崎に小庵を構へて、此土に居る。二代僧念西、後以如て一寺を成す。慶長十年僧行尊、之をその地に移す。

浮御堂　修験　大同年間開基といふ。伝云、僧元達紀州より来り、此地に錫を留め、海上を望みて、感ずる所あり。遂に一寺を創むと。其の坐、海に臨むを以て、かく称す。応永三十二年、僧泰元再興す。堂前に柏槙の古木あり、近辺に水観石といふあり。泰元以後、子孫血脈相続す。京都三宝院の下にて修験者なり。

廃荘厳寺　常称寺の東にあり。時宗なりし。今地名となり、薬師古仏像を須弥堂にあり。

廃海蔵寺・休念寺・丹花寺　市中にあり。並に時宗、

なりしも皆地名なり、

廃金剛寺　持光寺の西にあり、禅宗なりし、今田圃なり、金剛屋敷と呼ぶ、本尊古佛持光寺にあり、

廃西方寺　寶土寺光明寺の間にありて、浄土宗なりし、慶長年間廃せり、本尊ハ持光寺にあり、

廃正覚寺　後地村の地にあり、一小堂を存し、寺名の額を掲けて、立像の弥陀を安す、

備後國尾道二

古蹟名勝

玉浦　萬葉集、天平丙子、遣新羅國使之時、使人等乗船入海路上作歌八首の内に、奴波多麻能欲波安氣奴良之多麻能宇良尓安佐里須流多豆奈伎和多流奈里といふあり、又属物發思歌の内にもよみ、其反歌にハ、全く多麻能宇良と詠

せり、按ニ八雲御抄ニは、玉の浦を紀伊なりとあれど、別ニ紀伊國作歌といふニ、玉浦といふあれバ、これとは別なるらん、且奴波多麻の歌ハ、次ニ神島ならび牟漏能木の歌を載せり、神島ハ備中ニて牟漏能木ハ、當國鞆浦なれバ、使船西行の次第をもて、いへば、此多麻の字良ハ、備前備中の間とも見ゆ、故ニ、備中の玉島なるべしともいへど、細ニ地方の次第を推せるニも当らじ、牟漏能木

の次ニ、當國長井浦、風速浦、安藝國長門島の歌などあり、又屬物發思の歌を載せて、周防の上ニ置き、その内ニもまた玉浦の歌あれバ、奴波多麻などの歌も、此の地を詠しなるやも、知るべからず、

長江　久保町の内ニあり、今ハ人家を作りぬ、旧ハ長き入江ニして、菅公西謫の時、船を此地ニ停めさせ給ひしといふ事ハ、祠廟の部ニ見えたり、

浮橋 鹿苑院厳島詣記に、いつくしまのおとゞに、備後尾道に渡らせ給ぬ、御座は、大寧寺とて、天龍寺の末寺なり、海中まで浮橋つけて、赤道とやらなまめかしく、めづらしかりき、古へよりさるかたありし跡なきや、るしき波てふ、あなたの浮橋、この鐘のおとづりのおと、思ひよせられて、渡るなるべしとあり、大寧寺といへるは、天寧寺の訛なるべし、浮橋址跡、今は、いつくと尋ぬべくもあらずて、

寶珠巖 千光寺の内にあり、地上に出ること、高四丈八尺、周廿七尋、一に如意石とよぶ、俗烏帽子岩と称するは、形似たるをもてなり、岩上に、窪き處あり、玉の出しあとゝいふ、寺縁起に、昔此岩に玉ありしが、里人知ることなし、異國人来りて竊に玉を奪ひ去る、山を、大宝山と號し、浦を玉浦と呼ぶも、此事によれるといへり、

觀音石 不動石 並に浄土寺奥院福聚寺の傍に

あり、觀音石ハ、如意輪觀音の形像を彫る、古法所作といふ、不動石ハ、不動の像を、石面に彫る、

佛號石 淨土寺奥院、溪澗にあり、丈餘の巨巌に、佛号三を彫り、大施主、沙弥尼某と記せて、其傍に元德四年壬申四月日、願主知願とあり、

鼕々岩 千光寺の南にあり、小石にて叩ハ、鼓の響きをなせり、

博標岩 善勝寺山上にあり、その名由る所をしらず、

地藏石 持光寺内、小祠の後にあり、大石に、地藏の像を刻て、半身地上に出、土人ハ、三十三尋地藏と称す、是石の周をいふか、又ハ地中に埋し所までの長を計て、いふにや詳し、

端場石垣 千光寺の下、南濱に端場と呼ぶ地を、石垣のごとく、きりたてし所石、海中三十間許の間に、積置し所あり、石面に、方圓種々の紋を刻せり、多く丸の内に、山形などの印あり、古傳に

豊太閤大坂の城を築る時、此地子光寺山より大石を出し、此にて、船に積の所せし、その遺りしなりとて、また、堂崎の海中にも、十三間許の間、同しさ両の石あり、されとも、地名を、端埼とよぶ、されハ浄土寺山上より、出せし石といへり、

菅公腰掛石 長江小麦畑といふにあり、

山焼石 西街官道の側にあり、大石なり、石面に人の形に似たる窪（くぼ）みあり、俗傳に、山焼負ひ来る

といふ、

物産

鱸(すゞき)魬(はまち) 並ニ、此浦の物と、名品とれて、

鮴(めばる)鱠鮧(しろうを) 雑口(ざこ)鮓(すし) 並ニ、此地の名物なり、

酒 市中、醸(さうや)戸あり、皆佳酒を造る、萬葉集扶木集吉備の酒と、詠セし歌あり、庭訓往来ニハ、備後酒と出、是等、三原酒をもいひ、又尾道ともいへり、三原志備セたるへし、

酢(す) 此地ニ製、味尤酷(すると)酸ニして、遠方ニ販賣セて

柿渋(しぶ)　尾道生渋(きしぶ)とて、名あり、

鉄錨　豊器、及び大船の鉄錨(いかり)を打つ、

切石　市中、石工多し、尚町近地より多く好石を出せて、これを以、鳥居、燈籠、手水鉢、種々の物を造る、

木綿刺単皮(もめんさしたび)　藺笠(ゐあこうさ)、線香(せんかう)　帆(ほ)　茣蓙、此地の名産なり、

阿伽陀圓(あかだえん)　医師、松田氏の祖、かつて、遊行上人に此方を受け、世々手製して、売る、

人物

児玉元廸　同禎蔵　元廸女多喜　元廸、名ハ懐義、梅嶺と称す、字を以通称とす、世ゝ尾道町の医師なり、元廸少き時、京都に遊ひ、四方の名士に交り、後郷に帰り、医を業とす、尊円親王の真蹟を得て、古法を学ひ、書を善し、遂に一家をなし、明和丙戌没す、平賀晋民、碑文を作る、子禎蔵、名ハ淵、不揺と号す、父の業を継き、京都に往き、伊藤介

亭門人となり、醫ハ吉益东洞を師として、京に歸
て、教授し、生徒頗多し、嘗て京に名あり、天明乙
巳没す、子光寺に不揺先生筆塚といふあり、多能
ハ元廸の長女なり、亦書を善す、里中の女子多
く従ひ学へり、

松田道齋 名ハ維禎、號と以通称とす、世々醫を
業とす、道斎ハ、久米訂斎を師とし、儒学を講し
て、郷里に教授す、安永丙申没す、著書数品、その

藝藩通志 巻

家に蔵す、

橋本榮藏 名ハ知義、字ハ子中、寛栗と号し、また
培根堂と称す、人となり、篤實直樸にして、はしめ
本藩教授加藤孫三を師とし、後松田道斎に学
ぶ、天明年間、塾を設け、郷人のこどもに書を講し、傍
俗諭を以、民庶を導く、親切にして、人敬服す、寛
政癸丑没す、

勝島九右衛門 囗敬助 九右衛門、名ハ推徳、伊

藤仁斎父子を師とせて、家訓の書、一篇を著し、無裕斎言と名く、享保乙卯没す、敬助ハ九右衛門り曽孫なり、名ハ惟恭、字ハ敬仲、翼斎と号す、伊藤氏の学を伝え、好て詩文を作る、藝備二国の古蹟を採り、其史ぐ所と雑へて、一書を著し、藝備古蹟志と名く、文化戊辰没す、

島居亮左衛門　名ハ好之、杉田逆斎ニ学ひ、経史講説甚熟せり、尤易春秋ニ精し、又美術を善す、人となり、放惕ニして、垢面敝衣、人ニ見ゝ咸しけれども、聊も意とせず、藩府ニ出、府学ニ出入して、諸儒師と論議す、後郷里ニ教授し、従ひ学ぶもの多し、世ニよびそれ先生と呼へり、文化庚午没す、

福原俊平　名ハ元素、字ハ太初、五岳と号し、一ニ玉峯山人と称す、幼より画を好み、京都ニ遊ひ大雅堂を師とせしが、又一家の風韻あり、後大

坂に住し、画名衛高し、兼て詩賦書札を善す、寛政己未没せり、

島居儀右衛門　名ハ守瓊字ハ子瑤、為人恭倹平実なり、少き時より学に志し山崎伊右衛門ハ名畏、字ハ子保、周防の人、安永年間この地に来寓せりに学び、傍らに子姪の為に、経義をも講説す、平生実行、里人これ欽服せり、固て撰ハまれて、郷老となる、里俗こと侈靡を好みしが、儀右衛門に化して其風を変ずといふ、

文化丁卯没せり、秋性完、碑銘を作る、

子世子　福山侯の世臣、伊藤某の女なり、来て、里人油屋六郎右衛門が継室となり、夫に事ることを貞実にして、夫死し、前妻の子、七歳なるを、苦育すること、己が所生に同しく、心を尽して、教訓せり、稍長するに及て、勧めて学を勉しむ、又よく家政を勤む、僮僕凡四十餘人、これ畏敬承奉せり、文化乙丑没せり、蔓習師碑銘を作る、

孝義

笠岡屋庄左衛門　養屋孫右衛門　金屋三郎左衛門　三人ハ家里充より、延宝年間、歳饑へて、郷ニ餓人多し、三人ハ謀て、かゆを施ふ、藩賞して時服を賜ひぬ、

孝女そのハ、そのハ、立神屋源兵衛ヵ孫なり、父は婿養子なりしが、源兵衛没て後、生理いとまづしく、出さりぬ、母ハ子三人はぐゝみて、住久しが、二人の男子

も、他に出て嫁しても、その八、外に嫁せしが、至性純
孝なり、其夫ゆるし遣して、母を養ハしむ、家極て
貧しけれど、その平日母に事へ、病残養ふ、至らぬ
ところなし、寛政己酉賞せらる、

津國屋喜三　義父母につかへて孝謹なり、また、よく
家業を勤む、家産の傾んとせしをも、取とゝのへ、父先
て病あり、居室もまた悪壊る、喜三改造りなく
思へど、逋責のいまだ償ず、原もあまりけれバ、心に憐りて

債を了ず、その事をとまじて後、造り初しが、父の存
せる内に、成就せんことを、神に祈り、遂に病父を
新居に移すことを得たり、後また、母の病を養ひし、
懇誠を尽せし、実母とも迎て、同く住り、寛政己酉
賞を蒙る、

金屋甚右衛門　幼より至孝なり、母没して後、父
に事る益厚し、父病て、身體麻痺す、甚右衛門つね
に父の手を取りて、家の内を歩しむ、日毎に、必

甚しく、醫を迎て病を看せしむ、父家業を譲るといへども、事毎に父にとふて行ふ、後喪を勤ること甚謹む、天性慈惠にして、一家敦睦なり、喜三と同しく賞せらる、

孝女みよ　父の名闕く、みよ生れて、ほどなく、里民某七といふもの養ひて己が子とせしに、某七死し、養母病て、四體かなはざれば、みよ僅に十五歳、貧き中に、孝養を尽し、患艱苦みて、甚右衛門と同く賞せらる、

林屋弥右衛門　父を幸兵衛といふ、弥右衛門生て後、母狂疾ありて、元の家に帰りしが、弥右衛門幼して、深く憂ひ、常に、行き従て事しが、後眼を病みて、按摩導引などして、ひまに往けり、ゆきしかども日に母の起居を窺ざることなし、母或ハ、ほげび罵ることあるに、弥右衛門云ことなく事なれば、いつも志づまりぬ、母の病癒んことを祈り、能ことに始終して某神社に祷ること、凡八九年怠らず、寛政己酉賞

を蒙る、

庄七妻みき　病夫に事へて、力を竭し、舅姑に孝順なり、夫没して後、その父来りて、再嫁をすゝめけれバ、みき義を守り、泣て辞しけれバ、父も其義に服して止ミぬ、後に家産日に蹙り、みき昼ハ、人にやとハれ、夜ハ紡績して、その身、飢寒に苦しめど、老幼の衣食ハ時におくれず調ひけれバ、寛政壬子賞らる、

鍛冶屋徳兵衛　十五歳の時、鍛匠孫兵衛を師として、其家に寓し、六代の主につかへ、五十五年を経たり、主人志ばしば凶菑に罹り、孤子三人あり、徳兵衛その間に周旋し、思を焦し身を苦むること、人の堪ざる所なり、二孤も亦死し、末子常吉のミなるを、徳兵衛扶助して、心を尽し、能く神佛に祈り、よく成長せんことを願ひしとなり、齢七十に過きまで、妻をも娶らずして、一心にその仕ふる所に忠に

寛政癸丑賞あり、
富吉屋市兵衛夫婦　市兵衛ハ直七が子なり、生
性孝順にして施を好む、家口多くして貧しけれど、
父母にハ仕へまつりいたはりて、若ハ旅宿の貧客を憫み、
寒夜にハ渓邊を見めぐりて乞食の老たるものあ
れバ帰て、父に謀り、夫婦粥を煮て持ゆきて、
與ふ、妻も孝順のものにて、後心疾にかゝり、心たがひ
なりけれども、舅姑を尊ぶことを忘れず、直七、婦

の病を憂ひ、日毎に佛に詣て、さまざまを祈る、物ごと
少し遅ければ、市兵衛必ゆきて迎ふ、里人梅本
栄蔵、俗談講釈をせしに、市兵衛父子、いつも行て
聴けるに、寛政甲寅賞せられ、
魚屋清右衛門家奴武七　石見屋利右衛門家奴源
次郎　富吉屋藤三郎家奴半六　平野屋孫右
衛門家奴亀蔵　灰屋吉兵衛家奴與兵衛　鰯
屋九右衛門家奴忠兵衛　蓍屋與右衛門家奴

善藏妻須加　並に誠實にして、主人に忠勤なり、
寛政乙卯旌して賞を蒙る、

故家

十四日町其阿弥　古刀匠、正家か裔なり、古刀銘盡、備後鍛冶の部に、正家ハ、天平年間の人とせて、又正和の比にも、正家といふあり、並に三原に居、後分れして、此地に来るといふ、第六世に當て、正應年間、遊行二世、他阿上人の此地に来る時、一小刀を以て進む、因て其阿弥の號を受く、今の其阿弥久次郎、その後なり、家系譜なく、代數等ハ、詳ならず

らずて　以下代數を記せざる皆同し　廣島なれども對馬にも、同族のものあり、

長江町金屋　遠祖詳ならずて、氏を栗田といふ、世々尾道に住せて、土人に傳ふ、昌泰年間、菅公西謫の時、舟を此地にとゞめられ、當家の祖某、迎て饗しまつる、今の吉郎右衛門、その後なり、

十四日町笠岡屋　先祖小川壱岐、弘治永祿の際、山縣郡に來住し、毛利氏に屬せて、後この地に移

る、子又左衛門、此地の代官となり、家に毛利氏の文書を藏せて、文祿年間、豐太閤朝鮮の役、此家に止宿あり、今に太閤御座の間と稱せるあり、外門八、大寶山杉原氏の古城門を用ゆといふ、その作右衛門まで十二代、

久保町松田氏　先祖、松田正房、小條氏に仕ふ、後祿を辭し、薙髪して、卜隱と號す、正應年間遊行二代他阿に從て、この地に來り、遂に常稱寺内

に住し、醫を業とせしに、他阿より、阿伽陀圓、茉方を受け、世々其方を傳ふ、故を以、子孫今に至て、遊行廻國の時ハ、封内を從行す、文禄年間の卜隱ハ、豊太閤、朝鮮役に従ふ、太閤さまてとよろこして、菓、筍物および縫刀を賜ふ、今は其家に藏す、そに至り、世々卜隱と称ス、

土堂町鰯屋　先祖、錫島與兵衛といふ、弥平兵衛宗清の裔といふ、その家云、平家亡て後、宗清、伊賀国に隠る、その後與兵衛に至、天正年間、兵乱を避て、當郡向島に来り住し、又此地に移る、その傍吉、その後なり、郷に同族あり、

十四日町大西屋　澁谷金王丸の裔なりといふ、先祖彦右衛門といふもの、毛利氏に従て、相模国より来り、安藝高田郡吉田村に住し、後に對馬といふもの、始て此地に来り、その與兵衛、その後なり、家に甲冑刀槍等を蔵む、金王丸が所用といふ、毛

利氏の文書數通あり、

久保町泉屋　姓ハ葛西なり、先祖杉本次右衛門
世羅郡より来り、世々此地に住して、毛利氏の時、
一相といふもの、三十二石餘の俸を受く、その後
重政、寛文二年、藩より賀島を賜ふ、萬治より安
永の末まで、世々郷の老職たり、今の三左助、其
後なり、

土官流寓

尾道六郎　前太平記、藤原純友、諸國の兵を集む
るときを、記せしうちに、備後國にハ、尾道六郎と有、
る比、此地を領せしものなるべし、

荒木村重　陰徳太平記に、天正八年七月二日、荒
木志摩守父子、尼崎に在城、村重父子談し合
せ、上下五六人にて、藝州へぞ落行、村重ハ、
輝元より、扶持せられて、備後國尾道に閑居して

在しが伝忠卿なりとも、懇に書伝しあやふ云ことあり、
その古堂町寺小路に居りとも、また久保町、水之
庵に居たりともいふ、

墳墓

杉原元恒墓　西國寺内にあり、善勝寺にも、杉原
氏の墓といふあり、

古墓三　持光寺の北にあり、並に何人の墓なるを
詳にせずして、或ハ云、鯰江備前ヵ墓なりと、備前
ハ神邉故城主杉原盛重ヵ家人にて、永禄年間
この地に死せしといふ、

古塔　金剛寺跡の邊にあり、高一丈五尺餘、文字

あり、包含法界、功徳無邊、二利一化、無悩無疆、明徳二年辛未上巳日、其餘の文字、磨滅して讀むへからず、おもふに納經塔なるべし、或ハ千りうなと、銘に氏の墓なりといへども、恐くハ非也、

古塔 于光寺の傍にあり、天明年間、峠崗まて此塔を出せし、元應二年八月、願主沙弥西願といふ文字あり、

国立公文書館
National Archives of Japan